

女神の記憶

岡村義公

プロローグ

飛葉涼は、大学病院に勤務する医者だ。彼の専門分野は催眠療法で、屈指の名医と評判だった。その彼の元に香月莉里花という二十八歳の女性患者がやってきた。誰もが振り返るほどの八頭身美人で職業はモデルということだった。

彼女の訴えは変わっていた。

「付き合う男性がみんな死んでしまうんです」そう言つて声を震わせた。

初恋の相手はバイク事故、二人目が急性白血病、婚約者だった男は心室細動、四人目が交通事故で急死したのだ。

「それから私は人を愛することをあきらめました。でも先月・・・」

一方的に彼女に恋していた男性が、くも膜下出血で死亡したのだという。

「私は呪われた女なんだ。死に神なんだ。生きてちゃいけないんだ！」

莉里花は興奮して泣き叫んだ。

付き添いできていた彼女の母親は、そのあと莉里花は鬱状態になり、睡眠薬を飲んで自殺を図った。それで、飛葉の元に連れてきたのだという。

「そういう不幸な偶然はときとしてあり得ることですよ」と言う飛葉に、彼女はこう反論した。「みな付き合つて三カ月以内に死んでるんですよ。こんな偶然あるはずないじゃないですか！」

「しかし、恋人たちの死はあなたが原因ではありません。あなたが死んでも何も解決はしません」

「私だって死にたくないよ。もっと生きたいよ。でも、私が生きていれば、もっと大勢の人が死ぬことになる。だったら死ぬしかないじゃないの！」

飛葉は興奮する莉里花をなだめて、催眠状態にし、この不思議な現象の手掛かりがないか、莉里花の記憶を探った。すると彼女はしばしば同じ夢を見ていることがわかった。

その夢は二つあり、一つは人が死んでいく様子を自分がじつと見つめている夢、そしてもう一つが像の夢だった。

「幼いころから私は、この二つの夢を見続けていました」

莉里花は催眠状態で話した。

「その死んでいく人たちは、現代の人という感じではありません。男性は濃い髭を蓄えていますし、みな髪を結び、麻のような服を着ているのです」

「では、その像の絵を描くことはできますか？」

「はい」と莉里花は飛葉が手渡したスケッチブックに鉛筆で描き始めた。催眠状態ではこのようなことは可能なのだ。

莉里花が描いた像は、女性を抽象化したような不思議な形をしていた。頭部は小さく、目や鼻、口は無いようだった。腕はなく、胸部には二つのとがった乳房らしきものがある。そして腰は、ことさらに大きく強調されていた。

飛葉は莉里花の深層心理に迫ろうとしたが、莉里花には強く拒絶する心理が働いて、それ以上には進めなかった。飛葉は応急処置として、自殺を思いとどまる暗示を与えた。短期間なら効果はある。

目覚めた莉里花は、少し落ち着きを取り戻していた。しかし、この二つの夢は覚えていないという。忘れてしまっているのだ。

このようなことはしばしばあることだ。人は思い出さなくないことを記憶から消すことができる。

「先生、私、生きたいです」

帰り際に莉里花は救いを求める目でもう一度そう言った。

「あれえ？太ったあ？」

イタリアンレストランで待っていた飛葉に、高校時代のクラスメート、嘉村ユリかむらが屈託のない笑顔を浴びせてきた。その笑顔は目尻の皺を除けば高校時代と変わりなかった。

「久しぶりだね。高校卒業以来だから、約二十何年ぶりか。二人とももう四十か」

「私は遅生まれだから、まだ三十九だよ」

「違うないって」

二人は笑った。

「メールでだいたいのことはわかったけど、不思議な話だね。付き合う男性が次々と死んじやうなんて。確かにそれじゃあ、精神がおかしくなつて死にたくなる気持ちもわかる」

「それで、これがスケッチなんだけど」

「その前に注文しよ。飛葉君のおごりなんだから高いもの頼むぞ」

飛葉は苦笑いする。

そう言いながらも、ユリは二番目に安いワインを注文した。昔からそういうところがあった。

飛葉はスケッチブックを取り出して、莉里花の描いた像を見せた。

「最初はモダンアートの作品かと思つて専門家に見てもらつただけど違ふそうだ。それで考古学者のユリちゃんに見てもらいたいと思つて」

「学者つてほどじゃないけどさ」

「准教授なんだから立派な学者だよ」

ユリはスケッチブックを受け取つて見ると、こう即答した。

「ああ、これなら知つてる。山形の舟形町で出土した通称『縄文の女神』だよ。高さ四十五センチで今まで発掘された土偶では最大の国宝なんだ。国宝に指定されている土偶は北海道著保内野遺跡出土の中空土偶、青森の八戸市から発掘された合掌土偶、長野県茅野市棚畑遺跡出土の通称、縄文のビーナス、長野県中ツ原遺跡出土の仮面の女神の五点しかない。その一つ」

「へえ、なんか僕の知つてる土偶のイメージと全然違ふ」

「うん、土偶つていうとずんぐりしているものが多いけど、これはすらりとして美人だよ。だから『縄文の女神』つて呼ばれてる。ほらこれ」

ユリはスマートフォンをいじつて、「縄文の女神」の画像を飛葉に見せた。

「なるほど、そっくりだ。『縄文の女神』に間違いない」

「役に立つた？」

「ありがとう」

「じゃあ、ムール貝のワイン蒸しも頼んじゃおかつと」

ワインと料理が運ばれ、高校時代の昔話や友人たちの消息に花が咲いた。話を総合すると、どうやら一度も結婚していないのは、飛葉とユリだけだった。

二人はまた大笑いした。

二

それから飛葉は莉里花の治療を何度かおこなったが、事態は好転しなかった。莉里花の症状は重く、暗示や投薬で自殺を思いとどまらせるには、限界がこようとしていた。

飛葉はまたユリと会っていた。月末で懐がさびしいのか、場所は居酒屋になっていたが……

「このままじゃ、完治どころか自殺の可能性があるんだ。それでユリちゃんに治療に協力してほしい」

「私が？何をすればいいの？」

「僕は、莉里花さんを救うために残された方法は前世療法しかないと思ってる」

「前世療法？」

「ああ」

飛葉は説明し始めた。

前世療法というのは、アメリカの精神科医であるブライアン・L・ワイズ博士によって偶然発見されたものだ。一九八〇年、博士はキャサリンという女性患者と出会った。

彼女は強度の神経症で常に恐怖に怯えていた。博士は彼女に催眠術をかけてその原因を探ろうとした。神経症患者は恐怖の体験を思い出すことを恐れて抑圧することがよくある。そのために記憶から消されてしまっていることもある。

人は原因がわからない漠然とした不安や恐怖には対応できない。しかし原因がわかってしまえば、それを克服することができる。博士は原因を探るためにキャサリンに催眠術をかけ、次第に過去へ遡^{さかのぼ}っていった。

これを年齢退行療法という。しかし二歳の時まで遡っても原因は見つからなかった。そこである日、「あなたの症状の原因となった時まで戻りなさい」と言ってみた。

すると彼女は古代の白い巨大な神殿のような建物が見えると言い出した。そして自分はアロ

ンダだと名乗った。アロンダの村を洪水が襲った。彼女は自分の赤ん坊をしつかり抱いていたが、腕からもぎ取られて流されていく。

赤ん坊を助けようとしてアロンダも溺れ死ぬ。キャサリンの恐怖の原因は前世の体験にあったのだ。それがわかるとキャサリンの症状は驚くほど改善された。

「ふうん、でも前世なんて本当にあるのかな」

「さあ、僕にはわからない。ただ、治療をおこなうセラピストの中には信じている人もいるし、信じていない人もいる」

「飛葉君はどっちなの？」

「半信半疑ってとこかな。今までに前世が坂本竜馬だっという患者を六人診てるし」

ユリは笑った。

「ただ僕にとつては患者が治ることが大事なんであつて前世があるかどうかは問題じゃないんだ。動物を異常に怖がる患者がいたとして、前世でオオカミに喰い殺されたという記憶があつたとする。それがわかつて症状が軽減すれば、僕はそれが偽の記憶であつてもいっこうにかまわない。でもこんな事実もある」

飛葉は説明を続けた。

アメリカのヴァージニア大学精神科主任教授のイアン・ステイヴンソンは、前世記憶を持った子どもたちを取材して二〇〇〇以上の例を発見し、『前世を記憶する子どもたち』という本を書いた。その中にはこんな例もある。

一九八五年の夏、スペインのマドリード郊外に住むブランカという五歳の少女が父親とサン・フェルミン祭（牛追い祭り）に来ていたときのことだ。

ブランカが父親に突然、ある村に連れて行ってくれとせがんだ。父親は不審に思いながらも、娘の真剣な表情と異常な雰囲気とに彼女を村まで連れて行った。

ブランカは一軒の家の前で立ち止まり、中から出て来た中年女性を「お母さん」と呼んだ。そして自分は十六歳のときバスにはねられて死んだモニカだと主張する。

その女性は確かに五年前、モニカという娘をバスの交通事故で亡くしていた。しかし信じようとならない母親。

するとブランカは二階に駆け上がった。そして机の引き出しから写真を取り出して、写っていたモニカの友達の名前を読み上げた。

「リナ、ルシオ、ルーベン、サンドス、
ジョアン……」名前はすべて当たっていた。

「ただ、あなたの前世は○○ですとか言っていて法外な金をだまし取る詐欺師連中が大勢いることも事実だ。それは気をつけないと」

「そうね」

「ただ僕も何例か不思議な経験をしている……その二十代前半の男性患者は、常に強い殺人衝動に駆られていた。原因がわからず、僕は前世療法を試みた。すると、前世記憶で、彼は岡田以蔵と名乗っていた」

「岡田以蔵って、あの人斬り以蔵？」

「ああ、幕末の志士で多くの暗殺に関わっている」

「勝海舟の警護もしたんでしょう？そして二十八歳で打ち首獄門になっている……」

「さすがに詳しいね。その彼が自分の前世が岡田以蔵であることを意識したとたんに殺人衝動はピタッと止まっている」

「不思議ね」

「彼は生粋のロツカーで、岡田以蔵なんて全く知らなかった。こういう例をいくつか経験している。今回の莉里花さんのケースもそうなんだろうか」

「でも、生まれ変わりだなんて信じられない。非科学的だね」

「うん、これは僕が勝手に立てた仮説なんだけどね」

「お話ししましょう」

「僕たちの脳は一種のパソコンだよ」

「ええ」

「パソコンを再利用するときは、すべてのプログラムを消す。でも、もし仮に消し忘れのプログラムがあつて、それが再利用されたときに誤作動の原因となつたとしたら」

「消し忘れのプログラム？つまりそれが前世記憶つてこと？」

「そう考えると、説明できるかなつて思うよ」

「なるほど、ちよつとオカルト的に言うくと、前世の強い思いが残っていて、それが現世に影響する。さっきの人斬り以蔵だったら、前世の恨みのようなものが残つてそのロッカーに影響を及ぼしている。だから、ロッカーが自分の中に以蔵の消し忘れのプログラムがあることを意識することで、プログラムの誤作動を防ぐことができる」

「検証できないただの仮説だけどね」

「すると、莉里花さんも自分の前世を知ること、前世のプログラムをコントロールできるかも知れないつてこと？」

「それを願ってるんだ」

「じゃあ、たとえば、莉里花さんが前世の縄文時代で呪いにかけられた女性だとして、それを自覚すると付き合う男性がみんな死ぬという現象も収まるってこと？」

「わからない。でも試してみる価値はある。それにしても呪いだなんてやっぱ、考古学者は非科学的だよな」

「何言ってるかなあ。それよか莉里花さんってすごい美人なんでしょう？」

「ま、まあそうだけど、なんで？」

「飛葉君、莉里花さんのこと話すときすごく楽しそうじゃん」

「そんなことあるかよ」

「そんな美人なら、莉里花さんにふられた縄文人が呪いをかけて、彼女を好きになる人を呪い殺すプログラムをインストールしても不思議じゃないじゃない」

「確かに」

「飛葉君も莉里花さんを好きになると、きっと呪い殺されちゃうわよ」

「よ、よせよ」

「冗談よ。それより、私は何をすればいいの」

「記憶を失った人から記憶を取り戻す方法を使おうと思っている。莉里花さんを舟形町に連れ

て行ってその景観や遺物を見せたりすれば、前世療法を施術したときに記憶を取り戻せるかもしれない。だから縄文時代に詳しいユリちゃんにも同行してほしいんだ」

「ふうん、おもしろそうね。もし本当に前世があるんだったら、莉里花さんが取り戻した縄文時代の記憶は歴史的事実っていうことになるのね」

「その可能性もある」

「それなら私、二、三日だったら出張名目で行かれると思うわ」

そういつてユリは目を輝かせた。

四

八月の初め、飛葉の車は、朝早く出発したので、午前中に山形北インターチェンジに到着することができた。飛葉は昨年、八人乗りのステップワゴンに買い替えていた。

「家族が増える予定もないくせに、なぜ!？」

そうユリにからかわれていた。

ユリが来てくれて本当によかったと飛葉は痛感していた。莉里花の母親も同行する予定だったが、元々体が弱く、今年の猛暑で体調を崩していたのだ。

それに何よりユリの天真爛漫な明るさが、莉里花の病状を軽くしているようだった。運転席の飛葉にも、莉里花の笑い声が時折聞こえてきた。

さらに幸運なことに舟形町で開催されている「縄文の女神里帰り展」に間に合ったのだ。レプリカではなく、本物が見られる。

インターから舟形町までは一時間かからなかった。飛葉たちは、「縄文の女神」が待つ中央公民館へと入って行った。

二階へ駆け上がるとそれはあった。飛葉は初めて見るその左右対称の曲線美に驚いていた。縄文時代の人々の美に対する高い意識を感じることができて、感動していた。

飛葉の隣で空気が揺らぐ心配がした。飛葉が素早く横を見ると、莉里花がその細い体をしならせて倒れようとしている。飛葉は微かな体臭とともに彼女を抱きとめた。

莉里花はすぐに意識を取り戻した。

「幻影を見ました。私は高熱にうなされながら寝ています。周囲には大勢の人が私を取り囲んでいました。そして台座のようなところにこの『女神像』が置かれていたのです」

それ以上のことはわからなかったが、やはりここに来たことは正解だった。そう飛葉は思った。前世記憶を拒絶する彼女と、自分を取り戻そうとする彼女が戦っているのだろう。

昼食は、昨夜ネットで調べたらしく、ユリの発案で、小国川沿いにあるそば屋でとることに

なつた。ここでは天然アユが食べられるという。

塩焼きのアユが運ばれた。一口食べるとそのおいしさに三人とも感動する。背中からかぶりつくど芳醇な脂がジュツと口いっぱいに広がった。皮もパリツとして香ばしい。

「アユは六月中旬ごろから八月中旬ぐらいまだが一番脂がのつておいしいのよ」やはり、ネットでも調べたらしい知識をユリが披露する。

ユリによれば、アユは石についたコケを食べているために内臓もおいしく食べられるそうだが、あまりのおいしさに結局、皆アユを二尾ずつ食べた。もちろん内臓もみな残さなかった。さらに、ユリは手打ちのもりそばをお代わりしていた。

「この味は覚えています」と莉里花が言った。

「川魚は今まで食べたことがないはずなのに」

「縄文人の食生活は豊かだったのよ。シカやイノシシを狩って食べ、舟形だったらアユのような川魚も食べたでしょうね。その他にも、野生の植物だけでなく、ドングリや後にはクリを栽培して食べていたの」

「エエツ、ドングリって食べられるの？」

「もちろん、飛葉君は医者なんだからそれくらい知らないよ。でもしつかりあく抜きをしないとね」

「不思議ね。初めて来た気がしない。懐かしさで胸が締め付けられるよう」

莉里花が呟いた。

そば屋で聞くと近くに「舟形若あゆ温泉」という天然温泉があるという。露天風呂やサウナもある。三人はそこで旅の疲れを癒した。

その後、「女神の丘」と呼ばれる場所で、土器を焼く「縄文炎祭」を見ることができた。こうして莉里花の前世に関わるかもしれないさまざまなものを体験していくと、彼女は何かを確実に思い出しているように思われた。

五

「縄文の女神」が出土した西ノ前遺跡は、小高い丘の上だった。そこには石碑が建ち横に説明の看板があった。

「この遺跡はね、一九八六年の道路工事が発端となって見つかったの。そして本格的に発掘調査が始まったのが、一九九二年のことだった」

「今から二十二年前の話か」

「そう、縄文の女神が発見されたのは、八月の四日、五日、六日だったわ」

「ずいぶん詳しいんだ」

「だって私、その調査に参加してたんだもん。大きな土偶が見つかったって大騒ぎになった」

「そうか、あのときの夏休みか。興奮してたもんなユリちゃん」

「でも誰も関心なかったみたいだけど。飛葉君を筆頭に」

「そうだったかな」

「とにかく、一メートルぐらいの深さから今まで見たこともない大きな土偶が発見されたんでみんな興奮してた。金鉱を見つけたような大騒ぎになった。左足、腰、頭、胴、右足と五つに分かれた女神が次々と発見されるたびに、みんなが手を取り合って大喜びした。私もこの現場にいたことを今でも誇らしく思ってる」

「不思議な運命だよね」

「縄文の女神は、明らかに五つに割られて埋められていた。半径二メートル半ぐらいの狭い範囲から五つとも見つかった」

「なぜ」

「それがわからないんだ。いろんな説はあるんだけど」

太陽が沈もうとしていた。オレンジ色の光がユリの顔を染めている。

二人は気づかなかったが、莉里花は両膝を地面につけて何かをぶつぶつと呟いていた。

「どうしたの。莉里花さん」

そのとき莉里花は天を仰いでこう言っていたのだ。

「殺した。私が殺した。みんな私が殺した・・・」

莉里花は何かに取り憑かれたようにこう繰り返していた。

「莉里花さん、しっかりするんだ！」

「いや！！」 莉里花は突然、叫ぶと、長い髪の毛を振り乱して暴れ出したのだ。

「ユリちゃん、莉里花さんを押さえつけてくれ」

「わかった」

ユリは上から莉里花に覆いかぶさって押さえつけた。

「私は女神なんかじゃない。死に神だったんだ！」

莉里花はそう叫び、涙をポロポロと流した。

その隙に飛葉は医療力バンから鎮静剤と注射器を取り出して、莉里花の腕を素早くアルコール消毒し、静脈に一発で注射した。一瞬の出来事だった。二、三分もすると薬が効いたのか、莉里花はおとなしくなった。

ぐったりとした莉里花を、飛葉がお姫様だっこで車に運び入れる。

「私だったらきつと米俵を運ぶみたいに肩に担いで運ぶんだろうな」とユリが言う。

「あるいは、引きずってかも」と飛葉が笑った。

「びっくりした。でもよく医療道具を持って来てたね」

「これでも医者だからな」

「一瞬で鎮静剤を注射したね」

「精神科医は暴れる患者に慣れてるんだ。少しは見直したか」

「誰が」

「僕は見直したな。ユリちゃんの四方固め。身長が二十センチも低いのに・・・そっか、体重が二十キロ重いな」

「くうう・・・」

「やっぱ事実だと言いつ返せないか」

「・・・言い返すことはできなくても殴り返すことはできるよ」

「ごめん、冗談だよ、冗談」

六

ゆるい勾配のある道をギア比を落として登っていくと、点々と数棟のコテージが見えた。ここが今夜の三人の宿泊地となる。飛葉はまだ寝ている莉里花を、やはりお姫様だつてコテージまで運んだ。

ユリが布団を敷いてくれたので、飛葉はその上に莉里花を寝かせた。莉里花は穏やかな表情になっていた。幼子が昼間遊び過ぎて疲れて眠るように静かに眠っていた。霧吹きで吹いたように額に噴き出た細かい汗をユリが拭いてやる。

「朝まで目覚めないよ」

「そう、莉里花さんは、前世記憶を取り戻そうとしているのかな」

「どうだろう？でも、私が殺したっていうのはどういう意味だろう」

「わからないわ」

「確か『私は女神なんかじゃない。死に神だったんだ』とも言っていた」

「つまり、莉里花さんの前世は人々から『女神』と呼ばれるような人物だったってこと？」

「うん、しかし、実際はそうではなくて多くの人を殺したと前世の莉里花さんは思っている。

莉里花さんとあの『縄文の女神』が深い関係にあることは間違いないようだね。あの女神と関

係することに強く反応している」

「どうするの？明日、前世療法を試してみる？」

「わからないな。とにかく莉里花さんの様子を見ないと・・・莉里花さんが前世療法を拒絶するなら、僕にはどうすることもできないから」

七

夕食は二人ですることになってしまった。このコテージは二階でバーベキューができる。テーブルとイスが設置され、食材も用意してもらえた。

「莉里花さんがあんな状態なのにバーベキューするのは、なんか不謹慎な感じがするよ」

「そんなことないよ。外に食べに出かけるわけにもいかないしさ」

「それもそうだな。莉里花さんを一人にはできないし」

「そうそう、だから早く肉焼こ。あ、これちよこつと飲もうか」

ユリは一升瓶を取り出した。ラベルには「十四代」と書かれている。

「おいしいんだよ、これ」

ユリは飛葉のコップに酒を注ぐ。

「いい香りだね。日本酒じゃないみたいだ。果物の匂いがする」

「だよね」ユリは自分で酒をコップに注いで飲んだ。

「やっぱり、おいしい」ユリはにっこり笑った。

夜が更けていく。飛葉とユリはゆっくりと食事を楽しんだ。

「土偶って不思議だよね。どれも奇怪な顔をしている。一体、何のために作られたんだろう？
実用性はないみたいだし」

飛葉がユリに聞いた。

「初めは、立体的な形じゃなくて板状で平面だったんだ。一万二〇〇〇年〜一万一〇〇〇年ぐらい前。十字型のもが多くそれで手足を表現していたみたい」

ユリはスマートフォン画像を飛葉に見せる。

「それから、だんだん立体的になっていく。これ見て」

ユリのスマートフォンには次々とバリエーション豊かな土偶の姿が映し出されていく。

「こういつた立像土偶の頂点に立ったのが、縄文の女神だった」

「確かに芸術品だよね。こんな土偶は他にない。いつ頃作られたの？」

「今から四五〇〇年ぐらい前」

「土偶って全部で幾つぐらい発掘されてるの？」と飛葉が聞く。

「一万五〇〇〇〜一万八〇〇〇ぐらいだって言われてるわ」

「そんなにたくさん・・・だつて縄文人の人口って最大でも二十六万人ぐらいだったんだよね。一体、何のために作られたのか」

「妊娠している女性像が多いことから、物を生みだす大地の象徴として豊穡を祈るために作られたという説があるわ。それから、意図的に破壊されて土に埋められたりしていることから、祭礼や儀式に使われたという説もある」

「儀式って？」

「たとえば、足を怪我した人がいたら、土偶の足を折って、土に埋めて快癒を祈願するというようなことだつて説もある」

「それにしてもこれだけ多くの土偶があるつてことは、縄文人にとっては非常に大事なものであったつてことだよね」

「そう、出土している土偶は氷山の一角だから、実際の数はすごいんでしょね。一人一つは持つてたとか」

「スマホみたいに？」

「そう、きつと一万年後に私たちの遺跡が発見されたら、未来人は、『この楕円形のモノは、

何かの儀式に使われたに違いない』って思うかもよ」

飛葉は笑った。

「それで、嘉村ユリ准教授の土偶に対する学説は？」

「縄文人の宗教観は、すべてのものには精霊が宿ると考えるアニミズムだったから、土偶は精霊を表したものだと思う。そうであれば、土偶が人間を模してはいるけど、人間とは異なる奇妙な形をしていることも説明できる」

「確かに」

「つまり、土偶は目に見えない精霊を具体化したものだった。人間は目に見えないものに対して強い恐怖を覚える。病気で死んでいく人を見て、『原因がわからない』より、『精霊に取り憑かれて死んだ』と考えた方がはるかに恐怖を軽減することができる」

「なるほど、それって精神医学でも証明されている」と飛葉は相槌を打つ。

「さらにその精霊を具体化した土偶があれば、それに祈りを捧げるなり、破壊してやっつけるなりすれば、結果はどうであつても一応人々は納得できるんじゃないのかな」とユリが続けた。「うん、祈りを捧げて病気が治らず死んだとしても、祈りに真剣さが欠けていたとか、破壊して死人が出てても、破壊しなければもっと死者が出ていたとか」

「そう言い訳することによって目に見えない、つまり、自分の力が及ばない相手に対しての恐

怖を和らげることができた」

「なるほど」

「それに縄文中期以降になると、土偶はお守りのように使われたんじゃないかと私は思ってるんだ。私が勝手に思っている検証なしの仮説なんだけど」

「謹んで拝聴いたします」

「縄文人たちは子どもが生まれそうになると土偶を作った。精霊に子どもの無事を祈るために。それで、無事に生まれるとその子どものお守り神として保存し、死産すると破壊して埋めた」

「なぜ壊したの？」と飛葉が聞く。

「おそらく土偶を壊すことで、土偶に宿した精霊を元の大地に解放するためだったんじゃないかって思う。縄文時代に母子とも健康で生まれてくる確率は非常に低かった。だから、出産は、縄文人にとって最大のイベントだったんだと思う」

「今でも大変なイベントだけどね」

「縄文人が何歳ぐらいいまで生きていたか調べてみると、三十歳ぐらいになる。でも、平均寿命は十二歳ぐらいいだったという試算がある。それから類推すれば、いかに死産や乳幼児の死亡率が高かったかがわかる」

「十七世紀のロンドン市民の平均寿命でも十八歳ぐらいいだっているからね」と飛葉は医師らし

い知識を披露した。

「だから生きて生まれてくると精霊に感謝して土偶を保存し、その子のお守りとした。でも何らかの障害が起こると、その障害のある箇所、たとえば足を怪我すると土偶の足を折って土に埋め、快癒を祈った」

「それって、一種の脅しだったのかな。病気や怪我をさせるとその部分を破壊してしまうぞっていう・・・それとも祈りなのかな」

「私は、どっちの可能性もあると思うな。現代では神と人間の関係は常に神が上で人間が下だけど、精霊と人間の関係はそうではなかったんじゃないのかな」

「そうだよ。精霊は自然の象徴だから、あるときは人間は自然に打ち負かされるけれど、あるときは自然を克服して人間が住みいように破壊していく」

「そう考えると、これだけ盛んに作られていた土偶が弥生時代になるとピタッと作られなくなる理由もわかる」

「へえ、弥生時代にはもう作られなくなるんだ」

「そうなんだ。弥生人たちが日本にやってきて稲作を伝えると、能動的に自然を改造して生活できるようになる。つまり、精霊と共存する必要がなくなるとのこと」

「つまり、精霊たちは駆逐されてしまった」

「そう考えるのがいいかもね。あくまで私見だけど・・・」

八

「出産と土偶の関係について、哲学者の梅原猛さんが面白い説を唱えているんだ」

「どんな説？」

「梅原さんは土偶を調べて、五つの特徴に気が付いた。それは、妊婦であること。顔が異様であること。胸から腹にかけて中央に縦の直線があること。多くが破壊されていること。丁寧に埋葬されたものがあること。だったというの」

「うん」

「これらの特徴から、縄文人は、死産した子どもや出産時に死んだ妊婦を弔うために土偶を作ったという説を唱えたの」

「確かにおもしろい。でも、検証がなされていないね」

「梅原さんは、縄文人の特徴を色濃く残しているアイヌの老婆から話を聞いているわ。そしてアイヌ民族には、かつて子どもを宿したまま亡くなった妊婦は、特別な方法で埋葬したことを聞いた」

「特別な埋葬？」

「ええ、子どもを産めなかつた妊婦の無念さを晴らし、胎児の魂を解き放つために、死んだ妊婦の腹を裂いて胎児を取り出し、妊婦の胸に抱かせてから埋葬するという習慣があつた」

「悲しい話だね」

「だから土偶には、腹を裂いた一文字の傷跡がある。それに土偶の奇怪な顔は死者であるためだというの。そして、アイヌ民族などには、この世とあの世はすべて逆になるという宗教観があつた。それで梅原さんは、縄文人にも同じ宗教観があつたと考えた。つまり、この世で破壊された土偶は、あの世では完全な形で生まれ変わるといふの。だから土偶は破壊された」

「説得力がある」

「福島県では、死んだ妊婦の腹を裂いて胎児を取り出して抱かせ、藁人形と一緒に埋葬する習慣があつて、死体遺棄事件として問題になつたことがある。これは明治二十二年の話だけど」

「土偶が藁人形に変化していたつてことか」

「そうかもね」

「確かに、梅原さんの説は、土偶が作られた理由の一つになり得ると思う。でも土偶が作られた理由をただ一つに限定してしまうのは、無理があると思う」とユリが言う。

「なるほど、じゃあユリちゃんの説だと、土偶は精霊を形にしたものが起源だった。それが変

化してやがて、安産祈願、そして生まれてきた人の個人的なお守りとなった。その一つの派生系列として梅原説があるというわけか。じゃあ、土偶の女神はどれに属するの？」

「私は、現在発見されている土偶の中には、そのどれにも属さないものがあるって考えている」

「どういうこと？」

「飛葉君は、遮光器土偶って知ってる？」

ユリはスマートフォンを操作して、飛葉に遮光器土偶の画像を見せた。それは目が異様に大きく瞼を閉じているように見える土偶だった。

「これなら見たことがある。土偶といったら、これを思い浮かべる人が多いんじゃないのかな」

「イヌイットは、雪や氷によって反射する太陽の光から目を守るために、目の中央の部分だけ横に切れ込みを入れたサングラスのような遮光器を使っていたの。これよ」

ユリはスマートフォンに写し出されたイヌイットの遮光器を飛葉に見せる。

「なるほど、土偶の目の部分にそっくりだね」

「それに、この遮光器土偶は、青森や宮城などに多いの。そのことから、漂流などのなんらかの事情で日本の東北地方へやってきたイヌイットが遮光器土偶のモデルじゃないかっていう説

がある」

「じゃあ、縄文の女神もそのような特別なものだと？」

「遮光器土偶は神として崇められていた可能性があるらしい。だから、縄文の女神も何か特殊な能力をもった人がいて、それを神として崇めるために作られたものなんじゃないかって私は考えている」

「つまり、精霊より一段上の神としての存在ってこと？」

「ええ」

「なるほどね。仏教にしても、キリスト教にしても、釈迦やキリストといった一個人を仏像や十字架にして崇拝の対象としている。土偶の中には、そういったカリスマ性のある個人を像にして崇拝したものがあってことだよ。地域限定の神様のようなものが」

「ええ、縄文の女神もその一つじゃないかなって思うんだ。それなら、この土偶が精霊を形にした土偶と比べて異常に巨大である理由も、均整のとれた造形美をしていることも理解できるんじゃないかな」

「もう嫌だ。ここにはいたくない。これ以上何も思い出したくない」

「待って。もう少しですべてが解明できるかもしれないのよ」

「私は実験動物じゃない。事実なんてどうでもいい。早く楽になりたい」

階下から声が聞こえてくる。飛葉は目を覚ました。朝になっていた。ユリが寝るために部屋へ戻ってから飛葉は莉里花の前世について考えていたが、いつの間にか眠ってしまったらしい。飛葉はある決心をして階下へ降りていった。

莉里花は帰り仕度を整えて部屋を出ていこうとしている。それをユリが必死で引き留めている。飛葉が部屋に入っていくと、莉里花の動きが一瞬止まった。

「莉里花さん、僕は君を止めることはできない。でも君の主治医として一つだけ提案したいことがあるんだ」飛葉の声は落ち着いていた。

「なんですか・・」莉里花の顔は今にも泣きだしそうだ。

「もう一度だけ、君に前世へ戻る努力をしてほしいんだ。これで君を救えなかつたら、僕もあきらめる。そして君の希望を聞こう」

「私の希望？」

「ああ」

「私は前世で多くの人を死なせてしまったんでしょう。それで今、その報いを受けている。私が愛する人はみな死んでいく。私を愛する人もみな死んでいく。私は生きることをあきらめました。もう、生きたいなんて言いません」

「わかった。それをかなえよう。僕は医師として君の安楽死を約束する」
「飛葉君、何言ってるのよ。そんなことしたら」

「ユリちゃん、わかってるよ。自殺ほう助は軽い罪じゃない。殺人罪に問われるかもしれない。でも他に方法がないんだよ」

飛葉は莉里花をしつかりと見た。

「莉里花さん、この前、自殺に失敗したときは苦しかったろ？わかるよ。僕は自殺に失敗した患者を何人も見てるから。君がまた自殺を図っても死にきれないかもしれない。でも僕がやれば苦しまずに一〇〇パーセント死ぬる。僕が君の希望をかなえてあげる」

「本当？」

莉里花は人を頼って生きるしかない幼児の表情になっていた。

車の中では誰も何も言わなかった。莉里花が前世を過ごしたらしい西ノ前遺跡の朝の空気は澄み切っていた。

「じゃあ、始めようか」

飛葉は後部座席を倒して莉里花を寝かせた。莉里花は目をつぶった。ユリは飛葉が催眠術をかける場面を初めて見た。数を数えたり、話しかけたりして催眠状態に導くのかと思つたがそうではなかった。

飛葉が額の辺りに手を当てると、莉里花の体中の力が抜けて催眠状態に入ったことが、素人のユリにもわかつた。何かで読んだことがある。催眠術者とかけられる人が強い信頼関係で結ばれている場合、このようになるということ。ユリはなぜか二人を羨ましいと感じた。

「今、君は二歳になった。近くに誰がいる？」

「お母さん」

「じゃ、お母さんのお腹に戻ろう。そして君の悩みが起こったときまで遡ってみようか」
莉里花はフーと大きく息を吐く。

「何が見える？」

「美しい丘。三角の藁でできた家がたくさんあるわ。人が歩いている。麻でできた服を着てみな忙しそう」

「君は何をしている？」

「丘の近くの森で草を採っているの」

「なぜ、そんなことをしてる？」

「この草はね、病気に効く草なの」

「じゃあ、君はお医者さんなんだ」

「お医者さん？ 私は病気や怪我をした人にお祈りをしたり、薬草を飲ませたりして治すお仕事をしてるの」

「君は今、何歳？」

「十二歳」

「じゃあ、十五歳のころへ戻ってみよう」

「はい」

「何が見える？」

「大勢の人たちが私の家の前に並んでいるわ。三十人ぐらい。みな病気や怪我の人たちなの。でも……でも、みんな死んでしまうの。私がいくら祈っても。気持ちを込めて手を握ってい

ても。薬草を飲ませて」

「治る人もいるんだろう？」

「でもほんの少しだわ。私に力がないために多くの人が死んでいくんだわ」

「ユリちゃん、これはどういうことなんだ・・・大丈夫、莉里花さんには聞こえないから」

「莉里花さんは、縄文時代のシャーマンだったんだわ。三十人ぐらいの人が集まっているってことだけど、ここの集落の規模は大きくないから、きつと近隣の人たちもやってきてるんだと思う。つまり、莉里花の前世は周辺の村落からも治療にくる優秀なシャーマンだったことかな」

「それなのに莉里花さんは、みな患者が死んでいくと悩んでいる」

「それはどうしようもないわ。縄文時代の医学ですもの。でも、中国から仏教とともに薬草の知識が伝わる以前には、薬草を使っていた形跡がどこにもないの。だから莉里花さんの薬草による治療は、ある意味、画期的だったかもしれない」

「舟形は自然に恵まれている。そのために薬草の種類も多くて、薬草の知識や利用が進んだのかも入れないね」

「ええ、清流が流れているから傷口を洗ったり、薬を溶いたりするのに適している。縄文時代

に骨折をした部分に添え木をして治療した証拠が発見されているけれど、莉里花さんがいた舟形もそうだった先進医療の村だったのかもしれない。縄文時代の大きな集落は海沿いにあることが多いけど、舟形という山間の村だったからこそ、こういった薬草なんかの医学が発展したのかもしれない。その効果が近隣に伝わったんじゃないかな」

「じゃあ、あの縄文の女神は・・・」

「まさしく自分たちの病気や怪我を治してくれる女神、つまり、莉里花さんを表した女神像だったのよ」

「莉里花さん、今、君は患者の手を握って祈っている。患者はどうしてる？見てごらん」

「いや」

「どうして？」

「だって死んじゃうのよ。この人は」

「でもそれが君の仕事なんだろう？見なきゃいけないよ」

「どんな表情をしている？」

「穏やかな顔をしている・・・」

「それは君が手を握って祈ったからだ。病気や怪我の人たちが君のところへ集まって来たのは、

命を助けてほしかったからだけじゃなかったんだ。君に魂を救ってほしかったんだ」

「魂を？」

「そうだ。人々は魂の救済を求めて君のもとへ来た」

「本当？」

「本当かどうか見てみようか。じゃあ、最後に今の君の限界の年齢まで遡ってみよう」

「飛葉君、限界の年齢って前世の莉里花さんが死ぬ時ってこと？」

「そうだよ」

「そんな残酷な」

「でも莉里花さんには、必要なんだ。自分が死ぬ時を見ることが」

飛葉は真剣な表情でユリを見た。

「何が見える？」

「大勢の人の顔が見える。みな心配そうな顔をしている」

「それは君のことを心配しているんだ。君は今どうしてる？」

「寝ています。体中が熱い」

「他には何が見える？」

「像が見えます。台座の上に載っている像が」

「その像は何？」

「みんなで作ってくれたんです。私の力が少しでも強くなるように。私が少しでも楽になるように。私がないところでも私の祈りが通じるように。・・・そして今は、みな、祈っています。私の病気がよくなるようにって」

「そうだ。あの縄文の女神は君だったんだ。そして君が死ぬと、五つに割られて埋葬された。君の魂が天に召されて、来世で生まれ変わるように」

「私、死ぬんですか」

「そうだよ。怖いかい。苦しいかい」

「ううん、怖くないよ。苦しくないよ。みんなが祈ってくれるから」

飛葉がパチンと指を鳴らした。すると莉里花は目を開けた。

「これでわかったろう。恋人たちは、前世で君に魂を救われた人たちだったんだ。だから、現世で生まれ変わっても、死ぬ運命を感じたとき、君に魂を救ってもらうために君の元へやってきたんだ。君は呪われてなんかいない。死に神なんかじゃない」

「先生！」 莉里花は起き上がって飛葉に抱きついて泣いた。口をへの字に曲げて、子どもが泣くようにいつまでも、いつまでも泣いていた。

「ごめくん、遅くなっちゃった。資料の整理が長引いちゃってさ。ほら、何しろ今度、教授になるじゃない」

飛葉は黙って微笑んだ。

「あれ、今日はなんかオシャレだよ。それに、こんな高級なイタリアンレストランでござってくれるなんて、あの時以来だよ。あ、そっか、また何か頼みごとがあるんだ」

「実はそうなんだ」

「条件によっては聞いてやらんこともない」

「その前に受け取ってほしいものがあるんだ」

「なに？ 婚約指輪？」

「そんなわけないだろ。これだよ」

飛葉は内ポケットから、一枚の絵ハガキを取り出してユリに渡した。そこには、莉里花と背の高い男性が映っていた。そして莉里花の胸には、生まれたばかりの赤ちゃんが抱かれていた。「女の子だって。新しい女神の誕生だね」とユリは微笑む。

「それでね、その頼みごとだけど」

「その前に注文しよ。飛葉君のおごりなんだから高いもの頼むぞ」
ユリは嬉しそうに笑った。

テーブルの下では、小さな箱を持った飛葉の右手が、困惑したようにいつまでもぶらぶらしていた。

(了)